

高等部

初の男女合同遠足～燕岳と安曇野周辺散策～

近藤紫織 高野慎太郎

共学化に伴い、遠足も男女合同で実施した。2 月末から行先、実施方法の検討を重ね、6 月下旬と 7 月上旬の 2 週にわたる本番を迎えるまでの約 4 カ月間、引率に関わる学内外の打ち合わせをし、生徒たちと試行錯誤を重ねた。2 泊 3 日の本番を 2 週間に分けての実施の成功は天候頼みな部分もあったが、両日程とも晴天に恵まれ、生徒目標であった「心に刻む笑顔と景色」が果たされた 6 日間となった。

【行先の選定と行事の目的】

2024 年 2 月 29 日、24 年度の高等部遠足行先を北アルプスの燕岳(2763m)に決定した。多様なコースに対応できること、近年の男子部・女子部が臨んできた山と比較した際に無理のない難易度であることが主な理由であった。生徒と引率の合計が 300 名弱になる以上、宿泊先の確保が急務であり、3 月 16 日には中房温泉と燕山荘の日程を仮押さえた。実際は宿のキャパシティと引率人数の関係から、AB 日程の 2 週に分かれて本番の遠足を行うこととした。共学化後の遠足を検討し始めた当初から男女分けての遠足実施は予定になかった。「大自然の中に身を置き、日常で感じることのできない学びを得る機会」「生徒が行事運営を通してプロジェクトマネジメント力をつける」この 2 点を目的とした時に、男女で分ける必然性がなかったことが理由の 1 つである。昨年度同様、体育実習の必修単位として登山は 8 単位分を割り当て、原則として全員参加という位置づけで行った。

【日程】

4 月、まだ互いのこともよく知り得ない中、高 3 はリーダー男女 1 名ずつと運営組織を決めた。係内での連携を通して、互いを知っていく様子が見られた。以下が、おおまかな実際の日程である。

日付	
4/27	生徒組織決め 保護者会全体会で遠足のお知らせ
5/2	高等部生徒へ行先発表

5/15	足慣らし下見(伊豆ヶ岳)
5/29	足慣らし(伊豆ヶ岳)AB 日程合同で実施
6/3～ 6/5	本遠足下見(燕岳)
6/9	足慣らし予備日(伊豆ヶ岳)中高合同
6/13～ 6/14	散策コース本遠足下見(安曇野周辺)
6/26～ 6/28	A 日程遠足本番(燕岳) B 日程の生徒は休日扱い
7/3～ 7/5	B 日程遠足本番(燕岳) A 日程の生徒は休日扱い

【コース選択】

事前に 2 つのコース設定が可能であり、本番の遠足中は 4 つのコースが実在した。全員が一律に登頂を目指すのではなく、自分で選び取った形で大自然の学びを享受できるように設定した。〈登頂コース〉燕岳の登頂を目指す 2 泊目は燕山荘 〈散策コース〉中房温泉周辺の環境を学ぶ 安曇野周辺散策 2 泊とも中房温泉 〈富士見ベンチコース〉登頂は目指さず、途中まで登山をする 〈宿待機〉当日の急な体調不良でやむを得ず宿待機 260 名の生徒のうち、以下の通りの内訳であった。登頂コース:194 名 散策コース:50 名 第 2 ベンチコース 4 名 宿待機:1 名

【生徒組織/本番の生徒の様子】

学園新聞第 745 号を参考されたい。

【学外からのお力添え】

安全に万全を期すため、高等部本務教員以外に学内教職員で登山経験が豊富な方、外部のドクターとガイドにも帯同をお願いした。

特に以下の方々なくしては、今年度の遠足は決して実施できなかった。山行中の安全に関する判断、ブロックごとのサポート、応急手当はもちろんのこと、山に登る意味や生徒同士で気が付いてほしいことについて、時に教員以上に的確に生徒に示してくださった。

千島康稔氏	日本登山医学会認定国際山岳医
平田謙一氏	日本山岳ガイド協会認定 山岳ガイド
波間舞氏	日本登山医学会公認山岳看護師
鈴木麻里子氏	看護師
平田真理氏	女子部 66 回生
神澤良輔氏	男子部 66 回生

学部生の 2 名も加え最大で引率の大人は 21 名であった。

【おわりに】

「誰も欠けずに学園に帰って来られた」

創立初年から続くこの登山遠足が、今年もこの言葉をもって締めくくれる。幾度となく繰り返された遠足後のこの言葉の重さが今後も変わらず、生徒の笑顔とともに繰り返されていくことを願ってやまない。

かつて遠足を率いた諸先生方が払ってきた並々ならぬ努力と、緊張の中での的確な判断があり、そして言うまでもなく、その時々生徒が注意深く真剣に臨んできたからこそ、共学化後も遠足を中止するという決断をせずに 4 月を迎えられた。学校登山を取り巻く状況は長野県下ですら先細りであり、コロナ禍を経た今、あえて命の危険が伴う登山を続けていく覚悟を持つことは、自由学園が試されている、と言っても過言ではない。

海ではなく、山に行く。コースを選択できると言えど準備は全員で行い、全員参加の行事として進級した直後から 1 学期間をかけて臨む。単に協調性、忍耐力、計画力を養うことを目的とするならば、学内の行事で十分に設定可能だろう。では、なぜ山なのか。

誤解を恐れずに 1 つの答えを出すならば、「他者の存在に真に気が付くことで、見えないものの存在を確かに感じる」からなのではなかろうか。一人では行かない場所だからこそ、共に来た仲間が存在に助けられ、自分の身体の状態

にも気が付く。どれほど念入りな準備があろうとも、当日の天候ばかりは人間が操作できる対象ではない。それでも先人が切り拓いた登山道に足を踏み入れる時、まさに山辺に向かい目を仰ぐ時、見えないものの存在と出会う、敬虔な時間が始まるのではないだろうか。

考える術として引き合いに出されることが多いのは、羽仁もと子の「山登りは人生行路の縮図」という言葉だろう。この言葉だけを切り取らずにその後書かれている「危険と戦いつつ～～～攀じ登ってゆく」「友と共にする」この 2 つの部分にも立ち還り、羽仁吉一の「山があるから登る 経験を重んずる 実際を重んずる それは自由学園のやり方なんだ」をも踏まえて、残り続けた行事である。

散策コースの充実度を上げていくこと、限られた予算の中での工夫、生徒たちの目的意識など、改善の余地は尽きない。

この行事が、従来の目的のみに決してとらわれることなく、体育実習に含まれていること、あらゆる教科の教員がかわられることの強みを活かし、決して後戻りすることなく形を変えながら続くように祈る。

守られた行事となるよう力を尽くしてくださった方々へ心から感謝を申し上げて結びとする。